

# 元代江南士人にとっての「中國」

——「混一南北」の意味から考える——

櫻 井 智 美

はじめに

- 一 元代の「中國」は大きくなったのか
  - （一）『元史』の中の「中國」——前後の時代と比較して
  - （二）元代の「中國」の用例について——江南士人を中心に
  - 二 「混一南北」のもつ意味
  - （一）廣大な領域とその表現
  - （二）「混一南北」とは
  - （三）『事林廣記』の「大元混一圖」
- おわりに

はじめに

十三〜十四世紀にかけてのモンゴル帝國は、ユーラシアの廣大な領域を支配下もしくは勢力下におき、東方において元朝をうち立てた。近年、そのモンゴル帝國について、中國のみならずユーラシアの各地に與えた影響やその様相が盛んに

論じられている。中國史の文脈では元代と認識されるこの時代は、唐の滅亡以來、實に三百年以上の南北分斷を経て中國が一つになったとも言われる。<sup>(1)</sup> そのような認識の前提には、燕雲十六州があつてこそ中國の統一だとする考えがある。さて、筆者は前段において、「中國」「中國史」という用語を厳密に定義づけることなく文を進めた。しかし、この「中國」という用語そのものについて考える研究が近年数多くあらわれているように見受けられる。<sup>(2)</sup> おそらく、昨今の中華人民共和国の經濟成長・對外關係とも關聯して、「中國とは何か」という問題がクローズアップされていることも、そのような研究隆盛の背景としてあるだろう。ただ、筆者は、むしろ現代の中國がいかなるものかを問う意圖はない。本稿においても、元代の士人が「中國」だと認識するのはどのようなものだったのか、という問題について考えていきたいと思う。「中國」とは何を指すのか、地理的にどこを指すのか、どのような場面で「中國」が意識されるのか、そのような根本的な問いは、現代の國際政治においてのみ有効な視角ではなく、むしろ歴史上においてそれを考えることが、その時代ごとの價値觀や認識、そしてその變化を明らかにし、各時代の時代像を描くことにつながるのではないかと考えるのである。

さて、「中國」とは何かという問題は、實は根本的な問いであるため、モンゴル帝國・元代に限らなければ、多くの關聯研究が存在する。<sup>(3)</sup> 日本では岡田英弘が多くの著書で觸れるほか、<sup>(4)</sup> 最近では檀上寛・岡本隆司らが「中國」「中華」の歴史的な變遷について專著を上梓した。<sup>(5)</sup> その他、葛兆光・王柯・甘懷眞・許倬雲らが、古代を中心に、あるいは宋代をターニングポイントとして「中國」認識の變化を探った。<sup>(6)</sup> ここでは、華夷意識・華夷概念の存在を前提として、その成立や變遷・伸縮が、各著者の視角で具體的事例をもとに分析されている。その中で、モンゴル帝國・元代については、華夷の中でも「夷」に對する意識が論じられることがどうしても多くなり、「華」たる「中國」そのものや、それに對する認識の如何については、検討が二の次になっていた。また、近時、岡田英弘や杉山正明の議論からも影響をうけるかたちで、蒙元史の中國史上・世界史上の位置づけが中國で盛んに論じられ、『重新講述蒙元史』<sup>(8)</sup> 及び『殊方未遠——古代中國の疆域民族與認同——』<sup>(9)</sup> が出版された。しかし、これらの中では、モンゴル帝國の支配が中國史上に與えた影響や意義づけ

がその中心的な話題となり、當時の人々が「中國」をどう見たのかという史料の分析は残念ながらほとんど行われていない。

そのような状況のもと、堤一昭はこの問題に正面から取り組み、「中國」という地域概念も廣がったことに言及し、古松崇志による三史編纂過程についての議論を念頭に置いて、北アジアを含めた「中國」の出現は理念上ではあるが劃期的であるとした。<sup>10</sup> 堤の分析は、具體的な史料を挙げ、それを元代の遼金評價と絡めて論じた點で、中國における議論と異なる獨自性をもつ。しかしながら、現代中國の地域研究の一環として前近代との比較を念頭とした記述であり、また、モンゴル帝國を構成するモンゴルやムスリム等諸集團の中の一つとして漢人の認識を分析したため、漢人の認識について複数の史料を比較検討した分析には及んでいない。そのため、漢地における「中國」という地域概念の擴大という現象については、より細かく検討する餘地があると考えられる。本稿では、その検討の第一歩として「中國」という表現を分析するところから、史料を残した元代士人たちの認識について考えていきたい。

むろん、我々の漠然とした意識にある「中國」そしてチャイナプロパーを論じる時、「中國」という用語のみを取り出して議論するだけでは不十分であり、「中華」「華夏」「區夏」「方夏」等の用語やその概念をも含めた検討が必須であることは言を俟たない。しかしながら、全面的な検討を行っていく一つの足がかりとして、本稿では、當時における南北の認識の差という問題を念頭に入れて「中國」という用語の分析を行う。五代から金にかけて、華北は遊牧諸族との混淆や交流が盛んであるのに對し、江南は華北と比較すれば相對的に遊牧諸族の影響を受けにくい状態にあったと言える。華北士人と江南士人の意識には、元來その間に差があったことが、宋代を中心に各方面の研究から明らかにされている。このような先行研究を基礎として、元代の士人にとって、とりわけ江南士人にとって「中國」とは何なのか、ということについて、初歩的な考察を行うことが本稿の目的である。

第一章では、まず、遼宋金代における中國認識についての研究をまとめるとともに、正史における「中國」の用いられ

方の違いについて考える。その上で、元代史料中の用例について、江南士人を中心に、現時点での分析結果を述べる。そして、元代を経て「中國」は大きくなったという見方について再考するために、第二章では、「大きな中國」を強調する中で象徴的に用いられる「混一」という用語について、中國概念の擴大の根拠とされた「混一南北」という表現に焦點をあてて分析するとともに、『事林廣記』所收の「混一」をタイトルに持つ地圖に着目して考察を行う。

## 一 元代の「中國」は大きくなったのか

### (一) 『元史』の中の「中國」——前後の時代と比較して

元代に先立つ遼金兩朝は、古くは征服王朝の文脈でとらえられることが多かったが、その後は、中央ユーラシア型國家の伸張の過程として、歴史研究が盛んになっているように見受けられる。その中で近年、遼金の支配層やその治下の士人が持つ中華意識やアイデンティティ、そして、それに對する兩宋における中華意識について、「複数の中國」という觀點<sup>11)</sup>からのものであわせて、多くの研究が現れた。<sup>12)</sup>とりわけ、その時代の「中國」という用語の用いられ方について、趙永春らと王明蓀が系統的に分析を行っている。趙永春らは、五代から宋遼金を経て元に至る時代を、「複数の中國」が「單數の中國」になる必然的趨勢の時期とみなし、その必然的趨勢の裏にある「中國アイデンティティ」(認同)を探っている<sup>13)</sup>。一方、王明蓀は、統一中國の時代にはさほど問題にならない「中國とは何か」という問題が、三國(魏晉南北朝時代や五代・宋・金)にかけて問題となる、という立場から、一聯の研究を進めている<sup>14)</sup>。確かに、唐代後半から元朝の成立までは、「唐宋變革論」を持ち出すまでもなく、中國史上大きな變革の時期であり、その時期の士人の意識の變化は重要な問題である。そこで、元代の「中國」を考察する前提として、それらの研究をたよりに、五代・契丹(遼)から金・南宋にいたる「中國」認識についてまとめていこう。

五代十國時代、後梁・後唐・後晉・後周の各王朝については契丹や于闐等に對して「中國」を自任する史料が残っており、それは主に正統王朝たることを主張する意味で使われ、南方の諸王朝に對しても同じように用いられた。これは、大皇帝國が代表する、正統王朝としての中國觀を繼承していた。しかしながら、一方では契丹を強く意識し、漢族が多く集まっている地を指して「中國」としている面もあったとされる。ここで、「中國」が「中土」「中原」という地理的な意味を持ち合わせていることには注意が必要である。<sup>(16)</sup> また、南唐や吳越等南方の強國も、華北の五代王朝が「中國」を代表する正統王朝であることを認めていた。この時代の王朝分裂の形勢と意識は、北宋そして南宋へもつながっていくという。

對する契丹は、勢力としては自らが上であったとしても、「中國」の正統を自任する五代諸王朝を「中國」であると認めて、自稱することはなかった。北宋が五代を受けて立ち、南方諸國を平定した後、また澶淵の盟を結んだ後、北宋と契丹（遼）の對峙状況はより明確になる。その時代、北宋側は當然のごとく自身を「中國」と稱し、契丹が「中國」だとは決して認めなかった。それに對し、契丹側は「北朝」と「南朝」という兩正統王朝の竝立という認識を持つ一方、宋を「中國」の王朝だと認めており、「中國」を自稱する例はやはりほとんど見られなかった。<sup>(17)</sup> ちなみに、西夏は北宋を指して「中國」だとしている例が多く、西夏が自稱する例は、史料の不足もあり今のところ見られない。

南宋と金が對峙する時代になると、状況はまた變化した。北宋と政治的につながる南宋は、さまざまな意味で自身を「中國」と稱し、「金朝も中國である」と表現する事例はほとんどない。<sup>(18)</sup> それに對し、金朝もまた、華北を領有するとまもなく「中國」を自稱するようになる。注目すべきは、金朝が南宋を指して「中國」とよぶ事例が管見の限り見られないという点である。<sup>(19)</sup> 五代以來「中國」を自任する王朝は、結局のところ、「中原」を領有したことが自稱や他認の根據となっていた。唯一の例外が實は「南宋」であった。南宋は「中原」を領有しないで「中國」を自稱する所以を華夷概念に求め、金朝を夷とすることで金朝が「中國」でないという言説を生み出そうとした。そして、傳統的な中國概念や文化的な中國概念によって自らが「中國」であるという認識を強化したのであった。<sup>(20)</sup>

【表一】

|     | 舊五代史 | 新五代史  | 遼史    | 金史    | 宋史    | 元史    | 明史    |
|-----|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 成立年 | 974年 | 1053年 | 1345年 | 1345年 | 1345年 | 1369年 | 1735年 |
| 命中數 | 36   | 137   | 15    | 14    | 345   | 40    | 276   |
| 總頁數 | 2026 | 922   | 1556  | 2906  | 14231 | 4678  | 8642  |
| 係數  | 18   | 149   | 10    | 5     | 24    | 9     | 32    |

そもそも本稿が目的とする研究を思い至った経緯も、實のところ、南宋史料にみえる士人たちの華夷意識の強さを目の當たりにし、その「中國意識」の強さに驚きを感じたからであった。では、そのような意識は、元になってどう變化していくのだろうか。本節ではまず『元史』を中心とする正史を例に考えていく。

表一は、五代から明までの正史における「中國」という用語の出現頻度を、中央研究院の「漢籍電子文獻資料庫」を用いて示したものである。北宋初に編纂された『舊五代史』から、元末に編纂された三史（『遼史』『金史』『宋史』）までの内容については、王明蓀らの先行研究でも扱われているが、その變化については考察されていない。便宜的な方法ではあるが、ここで簡単に比較してみよう。表中の「命中數」は語彙の出現回数を表し、「總頁數」は中華書局點校本の頁数を表す。「係數」とは、「命中數」を「總頁數」で割って千倍したものである（小數點以下四捨五入）。この表からどのようなことが読み取れるだろうか。

表一中の「係數」は出現回数を頁數で割っただけであり、文字の大小や版組みを考慮して精密に割合を提示したのではない。しかし、各正史の成立年代や成立背景をも考え合わせると、いくつかが各書の特徴やその原因を説明することができる。まず、『舊五代史』と『新五代史』の係數が大きく違うことに気づく。<sup>24)</sup>五代諸王朝は「中國」の正統王朝を自任したが、同じ時代を記録した二種の史料中で、本来の記事を多く残している『舊五代史』より、後に編纂された『新五代史』の係數が異様に高い。この点については、春秋の筆法にならった『新五代史』撰者歐陽脩の意圖や、その編纂時の政治状況が大きく反映していると考えられる。

次に、『遼史』『金史』『宋史』についても、元末のほぼ同じ時期に編纂された點を踏まえて比較し

てみると、『遼史』『金史』が『宋史』より係数が低いことがわかる。宋朝を記録した歴史書の方に、遼・金を記録したもののより多く「中國」という用語を見ることができるのである。宋代において、「中國」意識が伸張したことについては、葛兆光らによってすでに指摘されており、『宋史』の割合が比較的高いことはそこからも説明がつく。<sup>(23)</sup>ただ、金が「中國」を自稱しているのに係数が低くなっているのはどういうことだろうか。王明蓀も指摘するように、『宋史』における言及の多くが北宋時期のものである。つまり、「中國」の用語が北宋では比較的多く用いられ、金・南宋の對立時代になると「中國」という用語がそれぞれの立場で避けられていたことを反映するのではないかと考えられる。

次に、『元史』についてみてみると、「中國」の出現頻度は低く、元末に完成した『遼史』『金史』と同じくらいの係数になっていることがわかる。『明史』では『宋史』以上に「中國」の係数が高いところを見ると、時代が降ると「中國」の用例が減る、という圖式は成り立たない。むしろ、元代において「中國」という用語があまり使われなかった、あるいは避けられていたと考えることが妥当だと思われる。周知のとおり、『元史』は明初に急ぎ編纂されたため、もとなつた史料からそのまま引用されている場合が多い。そのため、元代史料におけるもとの傾向が『元史』に反映したとみることに無理はない。ただ、『元史』編纂者の目にとまり書き換えられたとわかる箇所も、少ない事例だが見受けられる。どのような経緯で書き替えられたのか、『元史』の「許謙傳」を見てみる。

其の史を觀るに『治忽幾微』有り、史家の年經國緯の法に倣い、太皞氏より起こし、宋の元祐元年秋九月尙書左僕射司馬光の卒するに迄ぶまで、其の世數を備え、其の年歲を總べ、其の興亡を原ね、其の善惡を著わすは、蓋し以爲らく光の卒すれば、則ち中國の治復興すべからず、誠に理亂の幾なり、と。故に經を續けて「孔子卒」と書くの義に附し、以て其の意を致す。<sup>(24)</sup>

とあるが、そのもとなつた黃潛『金華黃先生文集』卷三二「白雲許先生墓誌銘」には、

(前略) 蓋し以爲らく光の卒すれば、則ち宋の治復興すべからず、誠に一代理亂の幾なり、と。<sup>(25)</sup>



とあり、宋濂ら『元史』編纂者が「宋」を「中國」と書き換えていることがわかる。もともとは宋という王朝の統治について述べていた許謙の言論が、宋濂らによつて「中國」という用語に書き替えられたのである。その改變の意圖は、元の記述としての不自然さを改めるところにあつたのか、明の意向に沿つたのか、あるいはそれ以外の意味があるのかの判断は難しい。<sup>(26)</sup> いずれにせよ、本例は「中國」が用いられた特徴的な例であり、元代において「中國」という用語があまり使われなかつたということは明確である。では、なぜ、「中國」があまり使われなかつたのか、『元史』を例に、その理由を探つていこう。

『元史』のどのような箇所でも「中國」という用語が表れるのか、四十例の内容について考えていく。宋代以前の史料にも見える用例として、黄河は「中國の患」であるという言い方や、佛教は西域から中國に入つて行われたという表現など、半ば慣用的なものがある(四例)<sup>(27)</sup>。また、モンゴル語を説明する時に、「中國」の言葉ではこうである、と説明しているものもある(二例)<sup>(28)</sup>。ただ、最も多いのは、「外國傳」など、高麗・日本・ベトナムその他外國の記事の中で、その地と對照するかたちで、漠然と中原を含む地域として、もしくはその地域を支配する政權として、「中國」という用語が用いられている例である(二十六例)<sup>(29)</sup>。つまり、内外の對比の中で、相対的な概念として「中國」が用いられている例が非常に多いのである。ただ、その用法は、番夷と對應する「中國」という傳統的な「中國」としての用法とは截然と分けることが困難である。というのも、地理的な概念をどの程度含むかはさておき、二十六例のうち、「西南夷」「西番」「外番」「遠夷」「不毛之地」「東夷」など舊來の表現を伴い、それと對照する概念として「中國」が用いられている例が、半ばを占めるのである。一例として、内附した順江の酋長に宣撫使の號を與えて郡縣を設置するよう、歸暘が出した意見をみてみる。

使し郡縣果して設け、事有りて救わざれば、則わち來附の意を孤にし、之を救えば、則わち中國を罷めて外夷に事え、所謂る虚名を獲りて實禍を受くるなり。<sup>(30)</sup>

これが、番夷を對義語とする「中國」であり、華夷概念を含んだ用いられ方であるのは明確である。「中國」が元代に用



いられることが少なかった理由は、番夷の表現が忌避された結果、その對義語としての「中國」も避けられたということだろう。

このように、『元史』の中で「中國」は、外の世界との對立概念として、傳統的な華夷概念に基づく用法を引き継ぐ一方で、外國にとつての我が國を指す表現としても用いられていることがわかった。當然のことではあるが、モンゴルの故地を含む「北狄」の用例が見られない點も付け加えておこう。

『元史』にはもちろん、外との對比でなく、「中國の法」「中國の治」など傳統に則つた概念的な用例や、文化を體現する概念としての「中國」といえる用例もある（九例）。例えば、『阿魯渾薩理傳』には、

世祖其の材を聞き、中國の學を習わしめ、是において經・史・百家及び陰陽・曆數・圖緯・方技の説皆な之を通習す。とあるのがそれであり、先に擧げた許謙の墓誌銘に見える「中國」もこの用法の一つだといえる。このように見てくると、『元史』の中の「中國」は宋代以前の「中國」と、用いられ方として大きく異なっているようには見えない。そこで、『元史』以外の元代の史料ではどのような「中國」の用法が見られるのか、それは南宋以前の用例と變化はあるのか、節を改めて考えていきたい。

(二) 元代の「中國」の用例について —— 江南士人を中心に

王明森によれば、「中國」という用語の用例について、中世から近世においては、「概念中國」・「文化中國」・「地理中國」・「政治中國」の四つに大きくわけることができるという。<sup>①</sup>「概念中國」は「傳統中國」や「華夷中國」とよぶこともでき、古代以來の「中國」「中華」「中原」を意味し、「夷狄」「外夷」がその反義語となる。次の<sup>②</sup>「地理中國」は、基本的には華北中原の地を指すが、それは「可變」であり、宋ならば宋朝の治めるところというように、傳統「中國」王朝が治めるところを指す。次の<sup>③</sup>「文化中國」とは、禮儀・信義・仁義・人倫、典章制度、倫理規範など「中國」的性

質を指す。最後の④「政治中國」は、「中國」を治めている複数の王朝の中で勢力があるものを指すとされる。<sup>32)</sup>『元史』の用例を確認したところ、①と②のどちらともとれる用例が多く、その二つを截然と分けることが困難であることがわかった。また、モンゴル帝國・元代を見る上では、④の指す複数の「中國」が並び立っている状態は考慮に入れる必要はないと思われる。そこで、王明蓀の分類のうち、①と③を、金・南宋からの變化があるかどうかを考える際の参考にしつつ、元代の用例を見ていく。

ただし、「中國」という用語の用例をすべて確認するのは容易ではない。「中國基本古籍庫」で「史地庫」と「藝文庫」の「元」代に限ってみても、それぞれ、一六六九條・五〇九條がヒットする。<sup>33)</sup>ここでは、本稿の目的に沿って、すでに歴史研究の対象として評價がなされている代表的な江南士人とその著作を、元初から元末まで時代順に挙げて検討し、その大まかな傾向や宋代からの變化について考えていく。サンプルの抽出にあたっては、元初の在野の人物も採りあげる等、元朝に對して異なる立場を持つ人物にも注意を拂った。

まず、宋末から元初に生きた人々についてはどうだろうか。湖州の人周密（一二三二—一二九八）は、元に入って在野の人物として杭州で過ごした。その隨筆『癸辛雜識』には、「西征異聞」の條があり、チンギス・カンが西方に遠征した際のエピソードから説き起こされる。西域に沙海があり、そこが華夷の境となつて中國と相通じなかつたが、巨獸がやってきてそこを橋渡ししたことで初めて西域と中國が通じたという。<sup>34)</sup>周密がチンギス・カンの西征やそこでの出來事に興味を持っていたこととともに、「西域」と「中國」の對比が意識され續けたことが表れている。周密と同じ時期、江西廬陵の人劉辰翁（一二三二—一二九七）の『須溪集』には、傳統的な儒教の概念としての「中國」、また「佛入中國」という定型句の表現がみられる。<sup>35)</sup>南宋で官僚となり、元では野にあつた彼らによる「中國」の用いられ方に、南宋との違いは見られない。

では、その次の世代において變化は出てくるのか。あるいは、在野にとどまつた人物と元に出仕した人物とに違いは

あったのか。劉辰翁の息子であり、書院の山長となった劉將孫（一二五七—？）の『養吾齋集』（四庫全書本）には「中國」の表現は見られない。一方、南宋宗室の子孫にして元朝で顯官となった趙孟頫（一二五四—一三三二）の文集『松雪齋文集』（四部叢刊本）にも「中國」の表現は表れない。人物によって「中國」を用いた文章の残り方に差があり、立場による違いも考え得るかもしれないが、劉將孫と趙孟頫の例をみる限り、王朝に對する立場の違いによって用いられ方が違うのかは明確でない。

また、趙孟頫よりやや早い時期から中央政界で活躍した江西建昌出身の程鉅夫（一二四九—一三二八）の文章では、大徳七年（一二三〇）の記述として、播州（現在の貴州省遵義縣附近）の位置づけを、  
播は中國の郡縣たれば、嘗て朝臣を以て出守す。<sup>36</sup>

と表現し、また、至大四年（一二三二）作の伯德那（中央アジア出身）の神道碑には、

（伯德）公中國の書を解せず、（中略）切々として子に教ふるを以て務めと爲し、嘗て之を戒めて曰く「（中略）宜しく勉めて聖人の書を読み、中國の禮を行うべし。（後略）」と。<sup>37</sup>

とある。これらの「中國」は、士人たちが共通に認識した「傳統中國」としての用例であり、また、禮の存在する「文化中國」をも指していた。

ここから、少しずつ時代を降った用例を求めて、大部な文集が残る吳澄（江西撫州、一二四九—一三三三）、慶元の人袁桷（一二六六—一三三七）と程端禮（一二七一—一三四五）、そして、元代儒林四傑と稱される柳貫（浙江婺州、一二七〇—一三四二）、虞集（祖籍は四川、江西臨州、一二七二—一三四八）、揭傒斯（江西富州、一二七四—一三四四）、黃潛（婺州、一二七七一—一三五七）の文集における「中國」の用例も確認した。そこでは、西域や外國・蠻夷と對照されるものとしての「中國」や、佛教傳來や黄河について用いるものがあるほか、古代の事象について論じる中で「傳統中國」「文化中國」として用いられる例が非常に多い。これらの史料から、「傳統中國」「文化中國」が顯著に表れている例を一例だけ挙げてみる。吳澄は

遼の末裔による著作の跋文において、

嗚呼、遼の始終は二百年にして、得る所の中國の地は、燕山一道のみ。<sup>(38)</sup>

と述べている。つまり、遼の支配した部分のうちの中國について、現在の認識である「燕雲十六州」と變わらないような認識を、元の吳澄が持っていたことが明らかとなる。これらの用例から歸納して、「中國」の用いられる場面やそれが含みこむ意味やニュアンスは、元代を通して宋代以前における「中國」の用いられ方と大きな變化はなかったことができるのではないだろうか。

ただ、政治的な側面が強く出て「わが朝の領域」とも取れる用例もある。<sup>(39)</sup> そうすると、宋代以前の「中國」の用例よりも大きな範囲を示しているのかが次の問題となってくる。しかしながら、管見のかぎり、そう斷言できる例を採せていない。江南士人たちは、元朝が支配する領域が南宋より、そして北宋よりも大きくなったことを認識していなかったはずはない。上都に至ってその遠大さに感嘆を覺えた袁桷の例は、彼が華北以遠の政治状況について正しく把握していたことを表しており、それは、先に擧げた周密の例をみても明らかである。しかし、その大きくなった領域を指して「中國」と表現することは、それまでの「中國」の用いられ方に照らして難しく感じられた可能性はないだろうか。この點は、次章で引き續き念頭に置いて考えていきたい。

公的な著作における用例も、若干確認してみよう。元代編纂の史料として、『大元聖政國朝典章』（以下『元典章』）・『通制條格』等の行政史料や『經世大典』の各篇目の序録（『國朝文類』所收）を見てみよう。用例は少なく、『元典章』の市舶司の記事に、

海商番國及び海南より物貨を買販して中國に到るは、市舶司に赴きて抽分すと雖も、而れども舡に在りて巧みに藏匿を爲す者は、即わち漏舶に係り、正に沒官を行<sup>(41)</sup>う。

と用いられるだけで、『通制條格』には「中國」という表現が見られない。<sup>(42)</sup> 他の公的史料も含め、外との對比で用いられ

る例にほぼ止まるようである。『經世大典』の序録でも、「市舶」「宣聖廟」「僧寺」の各目で「中國」が表れ、それぞれ、外國との對比、文化的中國、佛教が中國へ入るといような定型句としてあるのは、非常に示唆的である。このような元代の制度史料との關聯でひとつ注目したいのは、『大明律』の以下の一條である。

凡そ蒙古・色目人、中國人と婚姻を爲すを聽し（務めて兩相い情願するを要む）、本類の自ら相い嫁娶するを許さず。違う者は、杖八十、男女官に入れて奴と爲す。其の中國人の回回・欽察と婚姻を爲すを願わざる者は、本類自ら相い嫁娶するに従うを聽し、禁限に在らず。<sup>(43)</sup>

『大明律』に元代の制度の影響が色濃いことは周知の事實であるが、その中に「蒙古・色目人」と「中國人」を對照的に見る視點が表れている。元代であれば「漢人」「南人」と表現されたところが「中國」に變えられたとも考えられる。「中國」の持つニュアンスが、このような用いられ方につながったと言えよう。

本章では、元代の「中國」の用例を探ってきた。もう少し多くの例を調べる餘地はあるものの、元代において「中國」が指すところに前代からの大きな變化は見いだせないことが確認できた。では、現在であれば「中國」という用語で代辯される「我が國」のことを、當時の江南の人々はどう考えていたのだろうか。現代の我々から見ると「小さい中國」から「大きな中國」への變化に見える時代的特徴は、當時どう捉えられていたのか。次章では、元代に流行した「混一」という用語を軸に検討を進めていく。

## 二 「混一南北」のもつ意味

### (一) 廣大な領域とその表現

元代における士人の時代性や地理認識を論じる先行研究では、開放意識や世界性を論じるものが多く見られる。<sup>(45)</sup> 『元史』

地理志の冒頭に、

封建變じて郡縣と爲るより、天下を有つ者は、漢・隋・唐・宋を盛んと爲すも、然れども幅員の廣きこと、威な元に逮ばず。漢は北狄に梗み、隋は東夷を服する能わず、唐は患い西戎に在り、宋は患い常に西北に在り。元の若きは、則ち朔漠より起り、西域を併せ、西夏を平らげ、女眞を滅ぼし、高麗を臣とし、南詔を定め、遂に江南を下して、而して天下一と爲る。故に其の地北は陰山を踰え、西は流沙を極め、東は遼左を盡くし、南は海表を越ゆ。蓋し漢は東西九千三百二里、南北一萬三千三百六十八里、唐は東西九千五百一十一里、南北一萬六千九百一十八里にして、元は東南至る所漢・唐を下らず、而して西北は則ち之を過ぎ、里數を以て限り難き者有り。<sup>46</sup>

とあるように、それまでに存在しなかつた領域の廣さや、政權の強大さを強調する記述は、公的な史料を中心に枚擧に暇がない。<sup>47</sup>『元史』は明初の刊行物であるが、至元（一二六四―一二九四）後期から大德年間（一二九七―一三〇七）にかけて、このような記述がすでに多く見られるようになっていく。この時期は、モンゴル帝國が版圖を最大に廣げ、ユーラシア東西が「モンゴルの平和」のもと比較的安定していた。それを受けて『大元大一統志』が編纂・上呈されたのも、この時期であつた。

海外を視野に入れた至元・大德年間の著作においても、天下の廣さを強調した表現が多く見られる。例えば、領域の南端に近い廣州の地方志『大德南海志』では、編者陳大震の自序において、

大元區宇を混一するは、亙古無き所、長城の外は幾萬里なるやを知らず、皆な版籍に入る。鄒子の所謂る中國なる者は八十分の一なるは、信に誣いざるなり。南海の荒遠なること、圖中に在りて一黒志のみ。<sup>48</sup>

として、ここでは、中國は世界の八十分の一だと言つた鄒子（鄒衍）<sup>49</sup>の言葉が偽りではないと述べている。<sup>50</sup>汪大淵が泉州で著した『島夷誌略』でも、作者は後序において、

皇元聲教を混一し、遠く届かざる無く、區宇の廣きこと、曠古未だ聞かざる所なり。海外の島夷無慮<sup>おほむ</sup>ね數千の國、玉

を執り琮を貢ぎ、以て民の職を修め、山に梯して海を航し、以て互市を通ぜざる莫し。中國の往復して殊庭・異城の  
中に商販する者、東西州の如し。<sup>51)</sup>

と述べる。大元の支配する地域が未曾有に大きいことは、海外への窓口となった泉州や廣州における地理認識として自明のことであり、著作で言及すべきことでもあった。そして、海外に目が向けられた地域における記述であるからこそ、「中國」と對比する表現も表れている。『大徳南海志』の「中國」は、古代における認識を引用したものであり、元代の中國を指してはいない。そして、その古い中國と比べて、「大元」が長城を越えて広がる區宇を「混一」しているという表現をとっている。一方の『島夷誌略』も、聲教が「混一」したことで區宇も廣くなり、遠方の國から貢ぎ物が届けられたり、「中國」から簡単に外國（殊庭・異城）へ商業活動に出たりしている様子が描かれている。

ここで氣をつけた点は二つある。一つは、これらの史料ではあくまでも「中國」が大きくなったという文脈で表現されていないことである。前章でみたように、「中國」が指し示す範圍はやはり宋代までと大きく變わってはいないのである。もう一つは、「混一」という用語である。宮紀子は、「混一疆理歷代國都之圖」をはじめとした地圖に反映される當時の地理認識を分析し、「混一」・「廣輪」・「聲教」などの用語が大元ウルス治下で流行のタームであったと指摘している。<sup>52)</sup> また、「混一疆理歷代國都之圖」のもととなった清瀆「廣輪疆理圖」には「巨大化した中華」が描かれるとする。<sup>53)</sup> ここで見た『大徳南海志』や『島夷誌略』においても、區宇の廣さを強調して、確かに「混一」の語が用いられているのである。では、この「混一」は具體的にどのようなニュアンスで用いられるのか、時代の雰囲気を表す用語だとされているが、具體的にどのような文脈で用いられるのか、あるいは、華北と江南、公的な史料と私的な史料で用いられ方に違いはあるのかなど、より詳細な分析がのぞまれる。そこで、次節では「混一」という用語の用いられ方を概観した上で、「混一南北」の用例について詳細に分析する。「混一南北」という表現は、堤が立論の主要根拠としたところであり、「混一」の用例の中で代表的で、かつ「南北」という地理的な用語を含むために、より明確な範圍としての「中國」が描き出せると考



えられるからである。<sup>(54)</sup>

(二)「混一南北」とは

「混一」という用語の用いられ方についても、「中國基本古籍庫」を利用して用例を調べた。「混一」それ自體の用例としては、「南北」以外でも、「區宇／天下／車書／六合／職方／方輿／四海／區夏／諸夏／海内」等、さまざまな目的語をとる。時には、「天下／九州／海宇／聖朝」が「混一」する、という表現も見られる。また、「混一之功／主／盛」のように修飾語となることもある。これらの表現にほぼ共通するのは、王朝の統一という事象を指している点である。ただし、局地的な統一ではその表現は使われず、中原を含めた、ある程度の領域を含む場合に限られる。中國歴代王朝のうち、何らかのかたちで「混一」を實現した王朝は元朝だけではないため、いくつかの時代に對して「混一」という表現が採られている。そこで、「混一南北」（南北を混一す）「南北混一」の用例がどの王朝・人物を指しているのかを調べてみた。

「混一南北」四十三例・「南北混一」五十例を調査した結果、<sup>(55)</sup>隋もしくは隋文帝を指すものと、元もしくは元世祖を指すもののがかなりの割合をしめることがわかった。宋代までの文獻の多くで隋の事跡に對して「混一」が用いられるのに對し、元代以降になると、多くの場合元に對して、とりわけ世祖クビライの功績を指して用いられるようになることである。特に、元代の文獻においては、ほぼ當時の状況を指す表現として用いられていた。ここから、隋の文帝が南朝陳を亡ぼして南北朝時代を終わらせたのに對し、元の世祖は「天下をあまねく領有して、南北を統一した」という認識があったことがわかる。もちろん、宋や明に對しても「混一」を用いた例がわずかにはある。宋を指す数が少ないのは、燕雲十六州の存在が影響したからであろう。<sup>(56)</sup>一方、明を指すのは明代の文獻に限られる。

では、元代史料の中で元自身を指した「混一南北」「南北混一」の用例を具體的に見ていこう。まず、『國朝文類』に引用される『經世大典』「治典・版籍」の序録に、

南北混一すること越えて十有五年に迫り、再び亡宋の版籍を新たむ。<sup>57)</sup>

とあり、時期や文脈から考えて、ここで言う南北の南は舊南宋を指す。つまり、北は至元七年にすでに戸籍が作成されていた中書省・陝西行省などを指し、それと一緒にになったという意味であろう。同様に、『至正金陵新志』においても、宋までの金陵の歴史を概観した後で、

本朝南北を混一し、凡そ路府州縣の建つる所、初めて疆域の廣狹、戸口の多寡を具う。<sup>58)</sup>

とあり、南宋を滅亡させた状況を述べ、その後金陵の状況を説明していく。同じような時期の出来事を「混一江南」に次ぐ出来事として表す例も見られるところから、「混一南北」が指すのは、實質的に南宋の滅亡に他ならないと言える。<sup>61)</sup>

上奏という政治の場における発言が、劉敏中の『中庵集』と程鉅夫の『雪樓集』のどちらにも収録される珍しい例もある。大徳十年（一三〇六）に翰林院からの弭災の策として、畏天（『雪樓集』では「敬天」）・敬祖（同「尊祖」）・清心・持體・更化の五條が上奏された。<sup>62)</sup> その「敬祖」の條には、

一、敬祖。（中略）我が太祖皇帝、朔方より起ち、身ずから百戰を歴して、諸國を收附し、惡衣菲食、櫛風沐雨するは、何ぞ其の辛勤に如かんや。世祖皇帝、親く行陣を歴して、心籌計畫、恭儉敬畏、以て天下を有ち、南北を混一するは、何ぞ其の辛勤に如かんや。<sup>63)</sup>

とある。太祖チンギス・カンが朔方から起つて多くの國を滅ぼし、世祖クビライが天下・區宇を混一したという、二段階で大元の發展を説明するやり方は、元代の史料において枚擧に暇がない。しかし、例えば、世祖クビライの至元八年（一二七二）の「大元」の國號を建てる詔では、

我が太祖聖武皇帝、乾符を握りて朔土より起ち、神武を以て帝圖を膺け、四もに天聲を震わし、大いに土宇を恢め、輿圖の廣きこと、歴古無き所なり。<sup>64)</sup>

とあって、太祖チンギス・カンが天命を受けて建國したことだけでなく、戦つて領土を廣げてそれまでにない廣い領域と

【表二】

| 版 本             | 地圖の表題  | 集、卷、門/類 | 路/道 |
|-----------------|--------|---------|-----|
| 和刻本             | 華夷一統圖  | 甲、2、地理門 | 路   |
| 江戸抄本（叡山文庫本）     | 大元混一圖  | 前、4、地輿類 | 道   |
| 元初刊本（對馬宗家舊藏本）   | 大元混一圖  | 前、4、地輿類 | 道   |
| 至順本（内閣文庫本）      | 大元混一圖  | 前、3、地輿類 | 道   |
| 至順本（故宮博物院本）     | 大元混一圖  | 前、3、地輿類 | 道   |
| 後至元本（北京大學/宮内廳本） | 大元混一之圖 | 癸、上、地輿類 | 道   |

なったことについても稱えられている。それが、大徳年間になると、領域の廣さについては世祖の功績に置き換えられ、「世祖以有天下混一南北」の概念が確立していることが明らかになる。<sup>(65)</sup> その認識において、「混一南北」が指すのは、紛れもなく南宋を滅ぼして「中國」を統一した事實なのである。次節では、『事林廣記』の「大元混一圖」について若干の分析を行い、江南士人が考える「中國」や「混一」の意味についてさらに考察を進めたい。

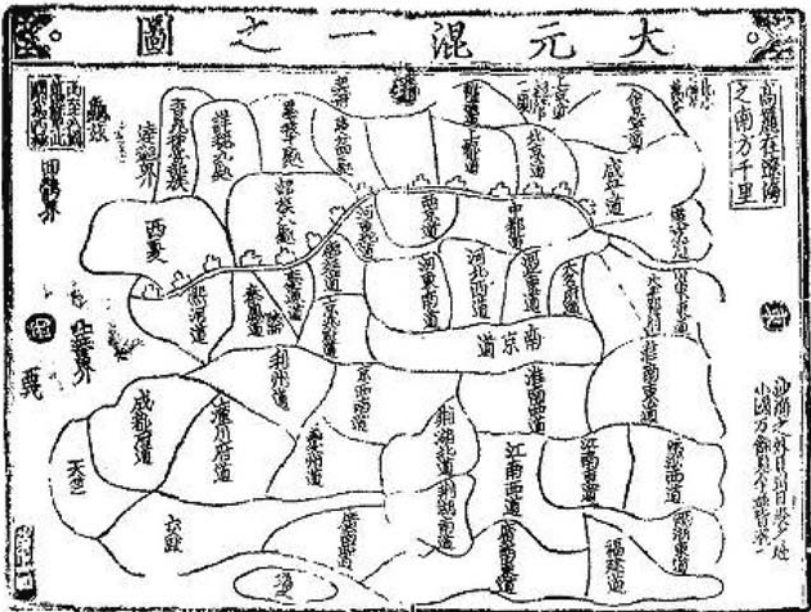
### (三) 『事林廣記』の「大元混一圖」

『事林廣記』と略稱される一聯の史料については、森田憲司が版本調査の先鞭をつけ、數多くの現存史料について調査し、近年では宮紀子によって未公刊の新出元刊本が紹介されて、その研究が大いに進展した。<sup>(67)</sup> 『事林廣記』は、南宋時代に編纂された『博文錄』を、元代になって改訂・解題したものである。その版本の違いによって元一代を通した變化を考えられる史料であり、編纂や出版の過程からも、江南の人々の志向を反映している可能性があると考えられている。<sup>(68)</sup> 元代史を研究する上で重要な史料であることは周知のとおりである。その版本比較の詳細については、紙幅の都合から森田・宮の研究に譲り、本稿では、現存する『事林廣記』六種における「大元混一圖」の變化に絞って分析してみたい。

まずは、「大元混一圖」という表題の變化について比較を行い、表二を作成した。表二は該當箇所の内容が古いと考えられる順に上から並べた。左の列から順に、版本（簡稱と所藏機關）、地圖の表題、地圖の掲載箇所、地圖内の行政区分（路・道）を表す。表からは、最も古い内容を残す和刻本にのみ、「華夷一統圖」と題する地圖が掲載されていることがわかる。和刻本は



【圖一】『事林廣記』（和刻本/元祿 12 年（1699）刊本/「泰定乙丑（2 年）仲冬增補」刊記あり）甲集卷 2「地理門」（中華書局本、p. 273）「華夷一統圖」



【圖二】『事林廣記』（後至元本/北京大學圖書館藏本）癸集卷上「地輿類」（中華書局本、p. 236）「大元混一之圖」

南宋から元への變化の時期の史料を保存しており、他の版本に見えない注目すべき内容を含んでいる<sup>(70)</sup>。地圖を詳細に比較していくと、和刻本所收の地圖とそれ以外の版本の「大元混一（之）圖」は繼承關係にあり、地圖の表題と若干の内容が書き替えられただけでほぼそのまま流用されたことがわかる。そして、その地圖は後至元本が出版された至正十年（二三五〇）に至っても踏襲され續けた。比較のため、すでに影印出版されている和刻本と後至元本の該當地圖を、圖一・二として掲げた。この二枚の地圖の違いは、「華夷一統圖」で用いられた金・南宋の「路」の名稱を「大元混一圖」では單純に「道」に書き替えた（例えば、江南西路↓江南西道、南京路↓南京道）以外、若干の地名を書き加えたり書き替えたりするのみである<sup>(71)</sup>。金・南宋の路の區分が元において道という監察區分として援用された場所も確かに存在するが、その名稱は變化しているため、「大元混一圖」は現實を全く反映していない觀念的な地圖に過ぎないことになる。

では、「華夷一統圖」「大元混一圖」という名稱がそれぞれなぜ採用されたのだろうか。元の統治下に入ってまもなくの時期において、江南にあつてこの地圖（和刻本の底本所載の地圖）を作成した人物、或いは『事林廣記』の編纂者は、南北の地が一つになった當時の状況を「華夷が統一された」状況であると認識したからであろう。至元年間において、東西南北の夷狄は確かに大元という王朝の領土・屬國となつていた。そして、「華夷」を稱する地圖は以前から存在していた<sup>(72)</sup>。そこからの類推で「華夷一統圖」の名稱を用いたと考へても無理はない。しかし、その後まもなく、つまり叡山文庫本の底本となった刊本（宮は至元から大徳年間と考へている）が作られる際に、「華夷」という表現が忌避された結果、その代わりとして選ばれた名稱が「混一」だったと考へられるのではないだろうか。そして、觀念的な地圖である「大元混一圖」は、それこそ「混一」という時代の雰囲気<sup>(73)</sup>に符合したため、その後の『事林廣記』の版本にも踏襲されていったのだろう。

續いて、この地圖を収録する和刻本の「地理門」、それ以外の刊本の「輿地門」の記事を若干見ていきたい。和刻本の「歴代國都」には、

唐鄴に都し洛に遷る。十國僭偽し、悉く我が宋に歸す。自昔唐虞より以前、國名著さず、夏よりの後、各の稱する所有り。宋汴に都し、後に杭に遷る。大元に至り、天下混一す。盛なるかな。<sup>(74)</sup>

とある。「元」字と竝んで「宋」字の前でも改行する點に加え、「我が宋」と書くところからは、宋代までの記述が南宋時代にすでに書かれ、元に入って「至于大元（大元に至り）」の部分を書き換えもしくは附け足したと考えられる。<sup>(75)</sup>「歴代國都」なのに元について首都の記載もない。また、この「天下混一」の表現が、南宋から元への交替という江南的な感覺を背景としていることを忘れてはいけない。一方、後至元本の「地輿類」の「歴代國都」には、

（唐）は鄴に都し洛に遷る。十國僭偽し、悉く（宋）に歸す。宋汴京に都し、（高宗）に至りて都を杭州に遷す。大元皇帝）天下を奄有し、南北を混一し、國を建て都を定め、燕山府を以て大興府と爲し、號して中都と稱す。山河の固、都邑の盛、宮室の美、前古の未だ有らざる所なり。美なるかな、萬世帝王子孫の基業なり。<sup>(76)</sup>

とある。後至元本を例として挙げたが、この内容は、江戸抄本（前集卷四「地輿類」）以降同じである。ここでは、「我が宋」の表現が「宋」に改められ、元が「南北を混一」した後、都を「中都」に定めたことが述べられている。燕山（燕京）を大興府として、中都と稱するようになったのは中統五年（一二六四）、<sup>(77)</sup>「大都」の建設が公式に宣言されたのは至元四年（一二六七）のことであり、<sup>(78)</sup>江戸抄本の底本となった版本が作られた際には、すでに大都が成立していたと思われる。しかし、その後も内容が書き換えられることはなかったということになる。

そして、ここに「大元皇帝奄有天下、混一南北」の表現が表れる。和刻本で「天下混一す」とあったところが「南北を混一す」に替わっている。つまり、「混一」したのが「南北」とされたことよって、元が南の南宋を滅亡させたことを直接的に指すように書き改められたと考えられる。堤一昭は、まず、國民國家以前の「中國」の意味と「正史」が編纂される背景を、前提として説明した上で、蒙元時代、すなわちモンゴル時代において、「中國」が巨大化し、また、「正統」が多元化したと論じている。<sup>(79)</sup>その論據となったのが、『事林廣記』所載の「大元混一之圖」と「大元皇帝奄有天下、混一



南北」というこの表現であった。堤は、「大元混一之圖」に表された世界こそが「南北」の意味であるとし、混一南北の「南北」は、圖の中に明示されている長城の南北であると解釋した。そして、モンゴルは『遼史』『金史』を編纂しており、遼・金の正統な皇帝が支配する地域は「中國」であるという考え方が存在し、このような、北アジアも含めた「中國」の出現は、理念上ではあるが劃期的だと述べた。しかしながら、「大元皇帝奄有天下、混一南北」という表現は、前節の『中庵集』『雪樓集』にみえた大徳時の表現と共通しており、直接には、淮水を挟む南北、金と南宋を滅亡させたことが第一義であった。そうすると、「大元混一圖」の範囲がそのまま「中國」であったとする見解には留保が必要である<sup>(80)</sup>。

近年、「混一疆理歷代國都之圖」のイメージさながらに、開放的なモンゴル帝國治下の中國を描く研究が増えている。確かに、「混一」の意味は「混一之盛」の表現が度々見えることから、統一王朝としての大元の盛んさを反映している場合も多く、<sup>(81)</sup>廣さのニュアンスを含み込んでいたことは否定できない<sup>(82)</sup>。しかし、多くの用例では曖昧ながらも、傳統的な「中國」や概念的な「中國」を「混一」するという文脈で用いられていたし、「南北混一」から何年、という『經世大典』「版籍」の序録のような表現は、例外なく南宋の滅亡（これは最大版圖となったこととほぼ同じ）からの年数を指していた。そして、そもそも「混一東西」という用例は、東魏と西魏を指す僅かな例を除き、<sup>(83)</sup>モンゴル時代を指す用例としては管見の限り存在しない。東西和合のイメージに引きずられて、當時の士人たちの認識や視角を過大解釋することのないよう注意する必要があるだろう。

### おわりに

本稿の考察から、「中國」の指すところは觀念的な意味ですでに定まっており、南宋の人々が「中國」と呼んだ地域と元代江南士人にとつての「中國」はほぼ同じものであったことがわかった。その意味では、「混一南北」の「南北」は、概念的「中國」の南北であり、直接的には、金と南宋の統一がそのように表現されたと考えられる。個人個人の考えの違



いにもよるが、大元の支配する地域が巨大であることを認識し、それを各所で表現する一方で、「夷狄」の反義語ともなる「中國」という用語を用いてそれを表現することが避けられた結果が、『元史』における「中國」用例の少なさにつながったと思われる。もちろん、モンゴルやチベットを含む、廣大な「大元」の領域が、「混一」の意味をもっと別のニュアンスを含むものに變えていたことは否定できない。しかし、太祖と世祖の役割を明確に分けた表現で理解した士人たちにとって、一義的な「混一」の對象は傳統的な「中國」であったと言えるのではないだろうか。

また、『事林廣記』の記述内容は、江南での認識を反映していると考えられる。彼らは知識として大元の大きさを知ってはいても、それを地圖には反映しなかった可能性もある。明初、急速に華夷概念が高まっていく背景には、朱子學の普及や朱元璋政權の態度だけでなく、急激な揺り戻しを許す江南士人たちの一貫した「中國」概念があった。また、『金史』『遼史』『宋史』の最終編纂が元末至正年間にずれこんだことは、士人たちの正統意識の決定にも大きな影響を與えたに違いない。今後、より多くの江南史料、特に元末の史料にあたって、彼らの考え方を明らかにしていきたい。

〔附記〕本論は日本學術振興會科學研究費補助金(15K02912)による研究成果である。

## 註

- (1) 南北分斷の長さについての見解は異なるが、蕭二〇〇六、李二〇〇九等も、この時期を南北それぞれ別の發展を遂げた時期と捉える。
- (2) 葛二〇一四 a b はその代表的な研究だと言える。
- (3) 趙二〇一五「緒論」で、中國の研究状況がまとめられている(一三―一六頁)。葛兆光は、葛二〇一七 a b でこれ
- までの議論をまとめている。
- (4) 岡田一九九二、一九九八、二〇〇四、二〇一四等。
- (5) 檀上二〇一六、岡本二〇一六、二〇一七。
- (6) 註(2)で挙げた以外に、葛二〇〇四、王二〇〇七、甘二〇〇七、許二〇〇九、葛二〇一一、王二〇一四、許二〇一五 a b 等。

- (7) 岡田については、岡田一九九二、二〇一〇等が中國語譯されており、近時翻譯が増えている。杉山については杉山一九九五、一九九七、二〇〇二が二〇一一年以降に陸續と中國語に翻譯された。また、杉山二〇〇五については、講談社版「中國の歴史」シリーズの一冊として二〇一四年に廣西師範大學出版社から翻譯出版され、シリーズ自體が好評を博したのみならず、姚大力がその歴史觀を好意的に紹介した(姚二〇一三)。その結果、中國でも杉山の史觀がより廣く認知されるようになった。
- (8) 張二〇一六。本書は、二〇一四年九月に清華大學中文系で開かれた『亞洲現代思想』の企劃による學術座談會「何謂「中國」、何謂「亞洲」・重新講述蒙元史」の内容を「專題」としてまとめて掲載したものである。會議内容に基づき、「圓卓論壇」として、「重新建構蒙元史敘事是中國學者面臨的重要學術挑戰」(沈衛榮)・「怎樣看待蒙古帝國與元代中國的關係」(姚大力)・「也談元朝統一中國的性質及其歷史意義」(劉曉)等の八篇、「專題論文」として、「漢文明在元時期・果真存在一個「低谷」嗎?」(姚大力)等の六篇の興味深い文章が収録される。しかし、その多くがこの時代の歴史的意義づけに重點をおいており、當時の人々の認識について史料を擧げて論じるものは多くない。
- (9) 上海二〇一六。本書は『上海書評』誌に掲載された關聯の書評やインタビュー記事をまとめたものである。蒙元史に關するものとして、姚大力「元朝不是中國的王朝嗎?」、「杉山正明談蒙元帝國」、「張帆談元朝對中國歷史的影響」が収録される。
- (10) 古松二〇〇三、堤二〇〇七。堤二〇〇八a b、二〇一三でも、基本的にその見解を踏襲する。詳細は第二章第三節で述べる。元代を中國擴大の轉機とみるものに妹尾二〇〇一等もある。
- (11) 趙二〇一四等に説明される。
- (12) 宋徳金・王明蓀・吳懷祺・李珍・齊春風らにも關聯する研究があるが、最近のものとして特に、吳二〇〇九、劉二〇一五、符二〇一六をあげておく。また、川本芳昭にも北魏と比較した論考がある(川本二〇一〇)。
- (13) 趙二〇〇九、二〇一〇、二〇一四の一部等が趙二〇一五にまとめられ、趙張二〇一五も關聯研究である。また、金人の中國觀の專著として熊二〇一四がある。
- (14) 王二〇一〇、二〇一二、二〇一三a b等が王二〇一五にまとめられる。
- (15) 王二〇一二、及び王二〇一五・二一五三頁。
- (16) 司馬光『資治通鑑』(中華書局、一九五六年)卷二八〇「後晉紀二」高祖天福元年(九一五六頁)には、即位前の石敬瑭が契丹君主に對して、「帝聞之大懼、亟使桑維翰見契丹主、說之曰、大國舉義兵以救孤危、一戰而唐兵瓦解(中略)。且使晉得天下、將竭中國之財以奉大國、豈此小利之比乎」と傳えた記事があり、範圍を限定したそこでの正統王朝ということを強く意識しているのが読み取れる。
- (17) 契丹(遼)の中國認識については研究者によって見方が異なり、改めて詳細な検討が必要ではあるが、本稿ではひ

とまず「中國」という表現の分析を重視する王二〇一五に據る。一方、趙二〇一五で「第三章 契丹與遼人の「中國」認同」を擔當した趙亮・孫久龍は、契丹が建國當時から「中國アイデンティティ」を持ち、「北朝」「南朝」と呼稱することや正統を主張することもすべて「中國アイデンティティ」の反映だとし、興宗以後に初めて中國意識が生まれたとする考え方を批判する。また、墓誌史料に見られる「大中心」という契丹の自稱についても、王明蓀が大國の中央や王朝としての正統を指すと理解するのに對し、趙亮らはまさに「中國」の意味だとしているが、にわかには納得しがたい。

- (18) わずかな例として、徐夢莘『三朝北盟會編』（上海古籍出版社、一九八七年）卷二四七、紹興三年一月一日（一七七六頁）に、「行宮宿衛使楊徽書在中、徽告完顏亮等一行官兵將吏等、（中略）況葛王既立於爾邦、西兵已興於中國、路途復隔、軍馬何歸」とあり、金朝治下を指した「中國」の表現を、撰者である南宋の徐夢莘はそのまま記録した。王明蓀は金朝治下を地理的「中國」と認識した史料として、本條を含めた數例をあげる。

- (19) それ故、少數ながら、地理的な概念で南宋が金朝をも「中國」と呼ぶ事例がみられたのである。
- (20) 王明蓀は、傳統中國、華夷中國、文化中國、地理中國、政治中國という枠組みで五代・契丹から金・南宋の中國觀を説明した。その詳細は次節で述べる。

- (21) 中央研究院「漢籍電子文獻資料庫」の底本は鼎文書局の

「中國學術類編」版で、中華書局本の頁數をとどめている。筆者は中華書局版『舊五代史』（一九七六年）、『新五代史』（一九七四年）、『遼史』（一九七四年）、『金史』（一九七五年）、『宋史』（一九七七年）、『元史』（一九七六年）、『明史』（一九七四年）を利用した。

- (22) 修訂本として『舊五代史』（二〇一五年）・『新五代史』（二〇一五年）・『遼史』（二〇一六年）がすでに刊行されているが、對照の結果「中國」の用例箇所に大きな違いが見られなかったため、校注文字數の少ない舊本を用いて計算した。

- (23) 葛二〇〇四。

- (24) 『元史』卷一八九「儒學傳一」（四三一九頁）に「其觀史、一有治忽幾微、做史家年經國緯之法、起太皞氏、迄宋元祐元年秋九月尙書左僕射司馬光卒、備其世數、總其年歲、原其興亡、著其善惡、蓋以爲光卒、則中國之治不可復興、誠理亂之幾也。故附於續經而書孔子卒之義、以致其意焉」とある。

- (25) 黃潛『金華黃先生文集』（四部叢刊本）卷三二「白雲許先生墓誌銘」は至正七年（一三四七）頃に撰された許謙（一二七〇—一三三七）の墓誌銘であり、「蓋以爲光卒、則宋之治不可復興、誠一代理亂之幾也」とある。許謙の先祖は京兆の人で、後に平江から金華に移住して金華の人となった。

- (26) 宋濂は自身の文集の中で「中國」の用語を比較的多く用いている。現在のところ、明初に生きた宋濂の狀況が大き

な改編の原因となったと考えている。

- (27) 例えば、『元史』卷一七〇「尚文傳」(三九八七頁)に「長河萬里西來、其勢湍猛、至盟津而下、地平土疏、移徙不常、失禹故道、爲中國患、不知幾千百年矣」と、卷二〇二「釋老傳」(四五二七頁)に「釋、老之教行乎中國也、千數百年」とある。

- (28) 同前書卷一七五「李孟傳」(四〇八六頁)に「阿合、中國稱兄、謂武宗也」とある。

- (29) 例えば、同前書卷六「世祖本紀三」至元三年八月丁卯(一一二頁)に「日本密邇高麗、開國以來、時通中國、至於朕躬、而無一乘之使以通和好」と、卷二二八「土土哈傳」(三二二一頁)に「土土哈、其先本武平北折連川按答罕山部族、自由徙居西北玉里伯里山、因以爲氏、號其國曰欽察。其地去中國三萬餘里」とある。

- (30) 同前書卷一八六「歸陽傳」(四二七〇頁)に「使郡縣果設、有事不救、則孤來附之意、救之、則罷中國而事外夷、所謂獲虛名而受實禍也」とある。

- (31) 同前書卷一三〇「阿魯渾薩理傳」(三二七五頁)に「世祖聞其材、俾習中國之學、於是經・史・百家及陰陽・曆數・圖緯・方技之說皆通習之」とある。

- (32) 王二〇一三 b、王二〇一五。

- (33) 筆者がここで用いたのは「哲科庫」「史地庫」「藝文庫」「綜合庫」であり、そこにおける「元」代の用例は六〇九九條である。もちろん、明代以降に元代編集の書籍が割り振られていたり、明代以降出版の書籍中に元代を指した記

事も出てきたりすることは言うまでもないため、嚴密を期した分析ではない。「哲科庫」の分析を後回しにしたのは、經書の注釋が多くを占め、同時代への認識は「史地庫」「藝文庫」に分類される書籍に、より顯著に現れるとの判断からである。

- (34) 周密「癸辛雜識」續集上「西征異聞」(中華書局、一九八八年、一五三頁)に「陳剛中云、成吉思皇帝常西征、渡流沙萬餘里、其地皆荒寂無人之境。忽有大獸、其高數十丈、一角如犀、能人言、(中略)西域有沙海正據要津、其水熱如湯、不可向近、此天之所限華夷也。終古未嘗通中國、忽一夕有巨獸浮水至、其骨長數十里、橫於兩涘如津梁。然骨中有髓竅、可容竝馬、於是西域之地始通中國。其國謀往來者每以膏油塗其骨、令潤、懼其枯朽、折則無復可通故耳」とある。

- (35) 劉辰翁「須溪集」(四庫全書本)卷一「臨江軍新喻縣學重修大成殿記」(至元二二、二二八六年)に「君君臣臣、父父子子、受之天爲中國、受之王爲嘉師」と、卷二「節庵記」(至元一六、一二七九年)に「其後播遷絕漠、自李侍郎外、無一人死者、以此羞當年而輕中國」、卷四「武功寺記」に「佛入中國」とある。

- (36) 程鉅夫「楚國文憲公雪樓程先生文集」(元代珍本文集彙刊、景印洪武刊本、國立中央圖書館、一九七〇年、以下「雪樓集」)卷一六「忠烈廟碑」(六三〇頁)に「孔子作春秋、諸侯用夷禮則夷之。播爲中國郡縣、嘗以朝臣出守」とある。

- (37) 同前書卷一八「大元河東郡公伯德公神道碑銘」(六八五頁)に「(伯德)公不解中國書、(中略)切切以教子爲務、嘗戒之曰、「(中略)宜勉讀聖人書、行中國禮(後略)」とある。
- (38) 吳澄『吳文正集』(四庫全書本)卷五八「跋長清趙氏述先錄」に「嗚呼、遼始終二百年、所得中國之地、燕山一道耳」とある。
- (39) 『金華黃先生文集』卷二八「敕賜康里氏先塋碑」に「(至正)二年(中略)日本商百餘人遇風漂入高麗、高麗掠其貨、表請沒入其人以爲奴。鐵木兒塔識持不可、曰、「天子一視同仁、豈宜乘人之險以爲利、宜資其還。」已而日本果上表稱謝。俄有日本僧告其國遣人刺探國事者。鐵木兒塔識曰、「刺探在敵國固有之、今六合一家、何以刺探爲。設果有之、正可令觀中國之盛、歸告其主、使知嚮化」とあり、『元史』卷一四〇「鐵木兒塔識傳」(三三七三頁)に引用される。
- (40) 袁桷『清容居士集』(四部叢刊本)卷四四「平山說」に「余嘗出居庸、上桑乾、始識其迤逸之勢、千里若一、方若布席、圓若拱壁、氈廬蔽空。凝雲積雪、杳不察其高下」とある。宮二〇〇七:二二頁を参照。
- (41) 『元典章』卷二二「戸部八・市舶」の「市舶則法二十三條」(中華書局本、二〇一一年、八八〇頁)に「海商自番國及海南買販物貨到中國、雖赴市舶司抽分、而在缸巧爲藏匿者、卽係漏舶、正行沒官」とある。
- (42) 『通制條格』卷一八「關市・市舶」の「延祐元年七月十九日」(方齡貴校注『大元通制條格』中華書局、二〇〇一年)には、前註所載の『元典章』に關聯して、「海商自番國及海南收販物貨到國、已赴市舶司抽分、而在船巧爲藏匿者、卽係漏舶、竝行沒官」とあり、「中國」が「國」とさられている。
- (43) 蘇天爵編『國朝文類』(四部叢刊本)卷四〇「雜著・市舶」に「或者以損中國無用之貨、易遠方難致之物」と、四一「雜著・宣聖廟」に「我國家定中國、廟祀如故」と、卷四二「雜著・僧寺」に「自佛法入中國、爲世所重」とある。
- (44) 『大明律』卷六「戸律三・婚姻」「蒙古・色目人婚姻」(遼瀋書社、一九九〇年、六二頁)に「凡蒙古・色目人、聽與中國人爲婚姻(務要兩相情愿)、不許本類自相嫁娶。違者、杖八十、男女入官爲奴。其中國人不願與同回・欽察爲婚姻者、聽從本類自相嫁娶、不在禁限」とある。
- (45) 註(10)に挙げたもの以外に、周二〇〇一、二〇〇二、宮二〇〇七等がある。ただし、周少川の取り上げる史料は、郝經を初めとした華北士人や政府刊行物に偏っていることに注意を要する。宮紀子は「混一疆理歷代國都之圖」を中心とした世界觀・世界認識を詳細に分析し、清濬の「廣輪疆理圖」に「巨大化した中華」が描かれているということを指摘した。
- (46) 『元史』卷五八「地理志一」(一三四五頁)に「自封建變爲郡縣、有天下者、漢・隋・唐・宋爲盛、然幅員之廣、咸不逮元。漢梗於北狄、隋不能服東夷、唐患在西戎、宋患常在西北。若元、則起朔漠、併西域、平西夏、滅女眞、臣高

麗、定南詔、遂下江南、而天下爲一。故其地北踰陰山、西極流沙、東盡遼左、南越海表。蓋漢東西九千三百二里、南北一萬三千三百六十八里、唐東西九千五百一十一里、南北一萬六千九百一十八里、元東南所至不下漢・唐、而西北則過之、有難以里數限者矣」とある。

- (47) 例えば、『祕書監志』卷四「纂修」(浙江古籍出版社、一九九二年、七二頁)に「至元乙酉(二年、一二八五)、欲實著作之職、乃命大集萬方圖志而一之、以表皇元疆理無外之大」とあり、『國朝文類』卷四一「雜著・朝貢」に「我國家、幅員之廣、極天地覆燾、自唐虞三代聲教威力所不能被者、莫不執玉貢璣以修臣職」とある(『經世大典』は至順二年(一二三一)に完成した)。

- (48) 『大德南海志』陳大震自序(『元大德南海志殘本(附輯佚)』廣東人民出版社、一九九一年、一〇三―一〇四頁)に「大元混一區宇、互古所無、長城外不知幾萬里、皆入版籍。鄒子所謂中國者八十分之一、信不誣也。南海荒遠、在圖中一黑志耳。然無地志、則又何以備史館之需。(中略)大德甲辰(八年、一三〇四)長至日、陳大震序」とある。

- (49) 『史記』卷七四「孟子荀卿列傳」(中華書局、一九五九年、二三四頁)に「以爲儒者所謂中國者、於天下乃八十一分居其一分耳」とある。

- (50) 陳大震『大德南海志』卷七「舶貨(諸蕃國附)」(宋元方志叢刊第八冊、中華書局、一九九〇年)にも「聖朝奄有四海、盡日月出入之地、無不奉珍效貢、稽顙稱臣」とある。

- (51) 汪大淵『島夷誌略』「島夷誌後序」(中華書局、一九八一

年、三八五頁)に「皇元混一聲教、無遠弗屆、區宇之廣、曠古所未聞。海外島夷無慮數千國、莫不執玉貢璣、以修民職、梯山航海、以通互市。中國之往復商販於殊庭異域之中者、如東西州焉」とある。『島夷誌略』は元末の至正九年(一二四九)に完成した。

- (52) 宮二〇〇七・七二―七四頁。京都大學の二十一世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文學の據點形成」(二〇〇二―二〇〇六年度)において、宮も参加する「十五・十六・十七世紀成立の繪圖・地圖と世界觀」が進められた。宋代から元代に至る地圖に言及する成果として、宮二〇〇四、二〇〇六、二〇〇七、應地二〇〇七a b等がある。

- (53) 宮二〇〇七・二五―三一頁。

- (54) 堤二〇〇七、二〇〇八a、二〇〇八bは「事林廣記」(後至元本)癸集卷上「地輿類」の「大元皇帝奄有天下、混一南北」の事例を取り上げたが、この記事自體については、後の第三節で詳述する。

- (55) 本調査は、二〇一五年一月に國立中央研究院歷史語言研究所において「中國基本古籍庫」を用いて行つた。歸國後に本務校で再調査したところ、収録範圍に若干の違いがあった。

- (56) 元の陳桎による『通鑑續編』(國立北平圖書館舊藏本)卷四では「〔己卯〕宋太宗皇帝太平興國四年(遼乾亨元年)〇是歲宋滅北漢、混一中原」とあり、九七九年在「中原」を混一したとする一方、劉焯の『隱居通議』(百部叢書集



成、讀書齋叢書本) 卷二「理學二・歐公言道不言性」には「蓋自五代極亂之後、而入於宋、混一諸國、中外太平」とあるように、十國の消滅を説くものもある。「宋史」卷六八「律曆志一」應天・乾元・儀天曆(一四九三頁)に「宋初混一高内」とある。

(57) 『國朝文類』卷四〇「雜著・版籍」に「(至元)十一年、上命丞相伯顔伐宋(中略)。迨南北混一越十有五年、再新亡宋版籍、又得一千一百八十四萬八百餘戶」とある。

(58) 同前書同條に「至元七年、有司請大比民數、復增三十餘萬戶」とある。

(59) 張鉉『至正金陵新志』卷四上の冒頭「疆域志總敘」(宋元方志叢刊第六冊)に、「本朝混一南北、凡路府州縣所建、初具疆域廣狹、戶口多寡」とある。

(60) 『國朝文類』卷二七、陽恪「平蠻記」(元貞二、一二九六年)に「大元受天明命、撫有萬方、自北而南、無思不服。至元十三年、歲在丙子、先皇帝以神武不殺、混一江南。繼而湖廣寇盜嘯聚蠡起」とある。陽恪は四川の人。

(61) 蘇天爵『國朝名臣事略』卷二「丞相淮安忠武王」(『元朝名臣事略』中華書局、一九九六年、二〇〇頁)には「今南北混一、宜穿鑿河渠、令四海之水相通、遠方朝貢京師者、皆由此致達、誠國家永久之利」という至元一三年(一二七六)四月の上奏がみえる。この「南北混一」も直前の南宋臨安の落城を指していることが明らかである。

(62) 『元史』卷一二二「程鉅夫傳」(四〇一七頁)に「(大德)八年、召拜翰林學士、商議中書省事。十年、以亢旱・暴

風・星變、鉅夫應詔陳弭災之策、其目有五、曰敬天、曰尊祖、曰清心、曰持體、曰更化。帝皆然之」とあり、その出典たる掲後斯による行狀(『雪樓集』(二一八四頁)所載)には「八年、召爲翰林學士知制誥同脩國史。明年、加商議中書省事。有旨、集議恒陽・暴風・星芒之變。公上言五事、曰敬天、曰尊祖、曰清心、曰持體、曰更化。皆切中當時之病」とある。

(63) 『中庵集』卷一五「翰林院議事」(北京圖書館古籍珍本叢刊第九二冊所收清抄本「中庵先生劉文簡公文集」三九二頁)に「一敬祖。(中略)我太祖皇帝、起自朔方、身歷百戰、收附諸國、惡衣菲食、櫛風沐雨、何如其辛勤也。世祖皇帝、親歷行陣、心籌計畫、恭儉敬畏、以有天下、混一南北、何如其辛勤也(後略)」とあり、『雪樓集』卷一〇「議災異・一尊祖」(四一一―四一三頁)にもほぼ同文が収録される。

(64) 『元史』卷七「世祖本紀四」至元八年一月乙亥(一二三八頁)に「我太祖聖武皇帝、握乾符而起朔土、以神武而膺帝國、四震天聲、大恢土宇、輿圖之廣、歷古所無」とある。『元典章』卷一「詔令」「建國號詔」(七頁)もほぼ同じ(「四震天聲」を「肆振天聲」とする)。「國朝文類」卷九「詔赦」の「建國號詔」で徒單公履(河南獲嘉の人)の撰とされている(該當箇所は「四振天聲」)。

(65) 具體的な時系列の變化については、紙幅と時間の關係から別の機會に期したい。

(66) 森田一九九二、二〇〇二等。



- (67) 宮二〇〇八 a b、二〇一八。
- (68) 『事林廣記』(後至元本) 癸集卷上「地輿類」の「江浙省所轄」地圖(中華書局本、一九九九年、二三九頁)で「杭州」の色のみり方だけが他の行省とは異なっていることは、江南の認識であるとされる(宮二〇〇七・一六四頁)。
- (69) 『事林廣記』の各刊本の章立ての相違は、宮二〇〇八 a・八一九頁、二〇一八・一一八一―二〇頁を参照。
- (70) 森田一九九三 a b。
- (71) その他細かい違いを列挙する(和刻本・他版本)。「北京路」…「北京道」と「上都道」と空白地に三分割／「路分四處」…左に「羣牧千處」を追加／「詳穩九處」…左に「吾昆神魯部族」(金代節度使名)を追加／「秦鳳路」…「陝西／秦鳳道」／「山東西路」…空白地／「山東東路」…「山東東道／益都府」／「天竺」と「交趾」の間に線が入る(單なるミスか)／右上端に「高麗在遼海之南方千里」を追加／右端の「沙海外日出入處小國萬餘今皆混一」…「沙海之外日出日沒之地小國萬餘見今竝皆混一」／左端「西」の下に「蔑」を追加。ここから、最低限必要な地名を追加していることがわかる。
- (72) 金の傀儡政權齊の阜昌七年(一一三六)作の「華夷圖」(西安碑林博物館藏)や南宋淳熙一二年(一一八五)作の「古今華夷區域惣要圖」(稅安禮『宋本歷代地理指掌圖』上海古籍出版社、一九八九年)の存在から、その影響を想定した。この「華夷一統圖」という表現が、日本で出版された(一六九九年)際に書き替えられた可能性も否定はできない。
- (73) 乙坂二〇一七・五一―六一―七一頁では、熊夢祥『析津志』の「可謂偉觀宮庭、具瞻京國、混一華夷、至此爲盛」を引用して、游皇城(大都で行われた大規模祭典)が持つ「混一華夷」の觀念を説明している。元末における游皇城實施が持つ意味を含め、「大元混一圖」が元末まで踏襲された背景や『事林廣記』に見える正統觀については別稿を留意している。
- (74) 和刻本『事林廣記』甲集卷二「地理門」の「歷代國都」(中華書局本、二七二頁)に「唐都鄴遷洛。十國僭偽、悉歸我宋。自昔唐虞以前、國名不著、自(憂)(夏)之後、各有所稱。宋都汴、後遷杭。至于大元、天下混一。盛矣哉」とある(≪改行、( )書きは原文では丸囲み)。
- (75) 森田二〇〇二・五七―五八・七二頁。
- (76) 後至元本『事林廣記』癸集卷上「地輿類」の「歷代國都」(中華書局本、二三五頁)に「(唐)都鄴遷洛。十國僭偽、悉歸于(宋)。宋都汴京、至(高宗)遷都杭州。大元皇帝奄有天下、混一南北、建國定都、以燕山府爲大興府、號稱中都。山河之固、都邑之盛、宮室之美、前古之所未有。美哉、萬世帝王子孫之基業也」とある。
- (77) 『元典章』卷一「詔令」「建國都詔」(六頁)に「中統五年八月 日、欽奉聖旨。中書省奏、開平府闕庭所在、加號上都外、燕京修營宮室、分立省部。四方會同、乞亦正名事。

准奏、可稱中都路、其府號大興。布告中外、咸使聞知」とある。

(78) 『元史』卷六「世祖本紀三」至元四年正月の末に「城大都」とある。大都建設の詳細については、渡邊二〇一七：六二―六五頁を参照。

(79) 堤二〇〇七：四三―四七頁、二〇〇八 a：一七六―一七八頁、二〇〇八 b：四〇―四六頁。

(80) 堤二〇一三：五四―五八頁では、「天下」概念が可變的で「中國」と同じとされることもあったこと、また「中國」での理想的な君主は内外の區別はしないとの概念などともあいまって、「中國」という地域概念も擴がったと考えられる、とする。しかし、書籍自體の性格もあり、新たな根據史料は示されていない。

(81) 例えば、『國朝文類』卷四〇「雜著・帝號」には「至于世祖皇帝、天經地緯、聖武神文、無敵於天下矣。試嘗論之、金在中原、加之以天討、一鼓而取之、得九州之腹心。宋寓江南、責之以失信、數道而擧之、致四海之混一。若夫北庭・回紇之部、白靄・高麗之族、吐蕃・河西之疆、天竺・

大理之境、邊屯蟻聚、俯伏內嚮、何可勝數。自古有國家者、未若我朝之盛大者矣」とあり、金や南宋が成し遂げなかった統一と一回り大きい版圖を表現している。

(82) 『事林廣記』「華夷一統圖」にも「沙海外、日出入處、小國萬餘、今皆混一」とある。

(83) 朱熹『資治通鑑綱目』卷三二「癸亥、梁大同九年」(五四三年)の「三月、魏大丞相泰帥軍應之、及東魏大丞相歡戰于邙山、大敗而還」の注に「行臺郎中封子繪言於歡曰「混一東西、正在今日。若復遲疑、後悔何及。」歡深然之」とある。

(84) 宋代においても、全く地理知識が無かったわけではなく、佛教地圖等の衝擊もあった。しかし、地圖は變わらなかつた。葛兆光氏は、「中心大而邊緣小、實際上不僅是一個地理位置的問題、而且是在分辨價值的差異、更是在確認「自我」和「他者」、地理上的中心與邊緣也一樣。……第一、這和中國人對於世界的實際認識沒有關係、……。第二、這和中國人瞭解地理和繪製地圖的技術也沒有關係」とする(葛二〇〇七：二二三頁)。

## 【文獻目録】

應地二〇〇七 a 應地利明『地圖は語る「世界地圖」の誕生』日本經濟新聞出版社

應地二〇〇七 b 應地利明「インド洋の陸封と解放——プトレマイオス圖・イドリースー圖・古今華夷區域惣要圖」關係論——、

藤井讓治・杉山正明・金田章裕編『大地の肖像——繪圖・地圖が語る世界——』京都大學學術出版會

岡田一九九二 岡田英弘『世界史の誕生』筑摩書房(一九九九文庫化)

- 岡田一九九八 岡田英弘『皇帝たちの中國史』原書房（二〇〇六新版）
- 岡田二〇〇四 岡田英弘『中國文明の歴史』講談社現代新書
- 岡田二〇一〇 岡田英弘『モンゴル帝國から大清帝國へ』藤原書店
- 岡田二〇一四 岡田英弘『シナ（チャイナ）とは何か 岡田英弘著作集四』藤原書店
- 岡本二〇一六 岡本隆司『中國の論理』（中公新書）中央公論新社
- 岡本二〇一七 岡本隆司『中國の誕生——東アジアの近代外交と國家形成——』名古屋大學出版會
- 乙坂二〇一七 乙坂智子『迎佛鳳儀の歌——元の中國支配とチベット佛教——』白帝社
- 川本二〇一〇 川本芳昭『遼金における正統觀をめぐって——北魏の場合との比較——』、『史淵』一四七
- 杉山一九九五 杉山正明『クビライの挑戦——モンゴル海上帝國への道——』朝日新聞社（のち『クビライの挑戦——モンゴルによる世界史の大転回——』と改題して、講談社學術文庫、二〇一〇）
- 杉山一九九七 杉山正明『遊牧民から見た世界史——民族も國境もこえて——』日本經濟新聞社（のち増補版、日經ビジネス人文庫、二〇一〇）
- 杉山二〇〇二 杉山正明『逆説のユーラシア史——モンゴルからのまなざし——』日本經濟新聞社（のち『モンゴルが世界史を覆す』として文庫化、日經ビジネス人文庫、二〇〇六）
- 杉山二〇〇五 杉山正明『疾驅する草原の征服者——遼西夏金元——』（中國の歴史〇八）講談社
- 妹尾二〇〇一 妹尾達彦『長安の都市計劃』（講談社選書メチエ二二三）、講談社
- 檀上二〇一六 檀上寛『天下と天朝の中國史』（岩波新書）岩波書店
- 堤二〇〇七 堤一昭『中國』の自畫像——その時間と空間を規定するもの——、西村成雄・田中仁編『現代中國地域研究の新たな視圈』世界思想社
- 堤二〇〇八 a 堤一昭『蒙元時代における「中國」の擴大と正統性の多元化』、西村成雄・田中仁編『中華民國の制度變容と東アジア地域秩序』汲古書院
- 堤二〇〇八 b 堤一昭『中國の自畫像と日本の中國像』、秋田茂・桃木至朗編『歴史學のフロンティア——地域から問い直す國民國家史觀』（阪大リーブル8）大阪大學出版會
- 堤二〇一三 堤一昭『モンゴル帝國と中國——コミュニケーションと地域概念——』、秋田茂・桃木至朗編『グローバルヒストリーと帝國』（阪大リーブル44）大阪大學出版會

- 古松二〇〇三 古松崇志「脩端「辯遼宋金正統」をめぐって——元代における「遼史」「金史」「宋史」三史編纂の過程——」、「東方學報」七五
- 宮二〇〇四 宮紀子「『混一疆理歷代國都之圖』への道——十四世紀四明地方の『知』の行方——」、藤井讓治・杉山正明・金田章裕編『繪圖・地圖からみた世界像』（京都大學大學院文學研究科二十一世紀COEプログラム）「グローバル化時代の多元的人文學の據點形成」〔十五・十六・十七世紀成立の繪圖・地圖と世界觀—中間報告書—京都大學大學院文學研究科（のち宮二〇〇六所收）〕
- 宮二〇〇六 宮紀子「モンゴル時代の出版文化」名古屋大學出版會
- 宮二〇〇七 宮紀子「地圖は語る—モンゴル帝國が生んだ世界圖—日本經濟新聞出版社
- 宮二〇〇八 a 宮紀子「叡山文庫所藏の『事林廣記』寫本について」、「史林」九一—三、（のち宮二〇一八所收）
- 宮二〇〇八 b 宮紀子「對馬宗家舊藏の元刊本『事林廣記』について」、「東洋史研究」六七—一（のち宮二〇一八所收）
- 宮二〇一八 宮紀子「モンゴル時代の「知」の東西—上下、名古屋大學出版會
- 森田一九九二 森田憲司「關於日本現存『事林廣記』諸本」、鄧廣銘・漆俠編『國際宋史研討會論文集』河北大學出版社（のち『事林廣記』中華書局、一九九九所收）
- 森田一九九三 a 森田憲司「『事林廣記』の諸版本について——國內所藏の諸本を中心に」、「宋代の知識人」（宋代史研究會研究報告第四集）汲古書院
- 森田一九九三 b 森田憲司「和刻本『事林廣記』について」、聯合報文化基金會國學文獻館編『第六屆中國域外漢籍國際會議論文集』聯經出版事業公司
- 森田二〇〇二 森田憲司「王朝交代と出版——和刻本事林廣記から見たモンゴル支配下中國の出版——」、「奈良史學」二〇
- 渡邊二〇一七 渡邊健哉「元大都形成史の研究——首都北京の原型——」東北大學出版會
- 符二〇一六 符海朝「遼金元時期北方漢人上層民族心理研究」中國社會科學出版社
- 甘二〇〇七 甘懷真主編『東亞歷史上的中國與天下概念』（東亞文明研究叢書）臺灣大學出版中心
- 葛二〇〇四 葛兆光「宋代中國意識的凸顯—關於近世民族主義思想的一箇遠源」、『文史哲』二〇〇四—一（のち葛二〇一一所收）
- 葛二〇〇七 葛兆光「作爲思想史的古輿圖」（甘二〇〇七所收、のち葛二〇一一所收）
- 葛二〇一一 葛兆光「宅茲中國——重建有關「中國」的歷史論述——」聯經出版事業公司（中華書局版、同年）
- 葛二〇一四 a 葛兆光「中國再考——その領域・民族・文化——」（岩波現代文庫）岩波書店

- 葛二〇一四 b 葛兆光「何爲中國——疆域民族文化與歷史——」天津大學出版社(中國)有限公司
- 葛二〇一七 a 葛兆光「歷史中國的內與外·有關「中國」與「周邊」概念的再澄清」中文大學出版社
- 葛二〇一七 b 葛兆光「什麼時代中國要討論「何爲中國」?·在雲南大學的講演記錄」、『思想戰線』二〇一七·一六
- 李二〇〇九 李治安「兩箇南北朝與中古以來的歷史發展線索」、『文史哲』二〇〇九·一六(のち同『元史暨中古史論稿』人民出版社、二〇一三所收)
- 劉二〇一五 劉揚忠「儒風漢韻流海內——兩宋遼金西夏時期的「中國」意識與民族概念——」(古典文學與華夏民族精神建構)河北教育出版社
- 上海二〇一六 葛兆光·徐文堪·汪榮祖·姚大力等著、《東方早報·上海書評》編輯部編「殊方未遠——古代中國的疆域·民族與認同——」中華書局
- 王二〇〇七 王柯「天下」を指して——中國多民族國家の歩み——」(中國文化百華13)農山漁村文化協會
- 王二〇一四 王柯「中國、從天下到民族國家」政大出版社
- 王二〇一〇 王明蓀「北宋的中國觀——以「中國」詞稱爲主的討論」、『宋學研究集刊』(浙江大學)二(のち王二〇一五所收)
- 王二〇一二 王明蓀「五代時期的「中國」觀」、『史學集刊』一三八(のち王二〇一五所收)
- 王二〇一三 a 王明蓀「三國時代的國家與「中國」觀」、『史學集刊』二〇一三·一
- 王二〇一三 b 王明蓀「南宋及金朝的「中國觀」」、『第三屆海峽兩岸宋代社會文化學術研討會論文集』浙江大學出版社(のち王二〇一五所收)
- 王二〇一五 王明蓀「近古分裂時期的中國觀」花木蘭文化出版社
- 吳二〇〇九 吳鳳霞「遼金元史學研究」中國社會科學出版社
- 蕭二〇〇六 蕭啓慶「中國近世前期南北發展的歧異與統合——以南宋金元時期的經濟社會文化爲中心——」、『臺灣師大歷史學報』三六(のち同『元代群族文化與科舉』聯經出版事業公司、二〇〇八所收)
- 熊二〇一四 熊鳴琴「金人「中國」觀研究」(南宋及南宋都城臨安研究系列叢書·博士文庫)上海古籍出版社
- 許二〇〇九 許倬雲「我者與他者——中國歷史上的內外分際——」時報出版(のち生活·讀書·新知三聯書店、二〇一五)
- 許二〇一五 a 許倬雲「華夏論述——一個複雜共同體的變化——」天下文化
- 許二〇一五 b 許倬雲「說中國——一個不斷變化的復雜共同體——」廣西師範大學出版社
- 姚二〇一三 姚大力「一段與「唐宋變革」相並行的故事」、『上海書評』(のち、同『讀史的智慧(修訂本)』復旦大學出版社、二〇一六)

所收)

- 張二〇一六 張志强主編、沈衛榮等著『重新講述蒙元史』生活·讀書·新知三聯書店
- 趙二〇〇九 趙永春「試論金人的『中國觀』」、『中國邊疆史地研究』二〇〇九—四(のち趙二〇一五所收)
- 趙二〇一〇 趙永春「試論遼人的『中國觀』」、「文史哲」二〇一〇—三(のち趙二〇一五所收)
- 趙二〇一四 趙永春『從複數『中國』到單數『中國』——中國歷史疆域理論研究——』(中國邊疆研究文庫·二編·綜合卷)黑龍江教育出版社
- 趙二〇一五 趙永春等『中國古代東北民族的『中國』認同』黑龍江人民出版社
- 趙張 二〇一五 趙永春·張喜豐「契丹的『中國』認同」、『黑龍江民族叢刊』二〇一五—一
- 周二〇〇一 周少川『元代史學思想研究』(東方歷史學術文庫)社會科學文獻出版社
- 周二〇〇二 周少川『中國史學思想通史 元代卷』黃山書社

“absurd language” [*huangtang zhi yan* 荒唐之言]) to be seen in the *Zhuangzi*'s modes of expression, whereas Liu Zongyuan reacted strongly against this.

## CONCEPTS OF “CHINA” AS SEEN FROM THAT HELD BY THE JIANGNAN LITERATI IN THE YUAN PERIOD: CONSIDERED IN TERMS OF THE MEANING OF *HUNYI NANBEI* 混一南北

SAKURAI Satomi

Many books and articles that address the question, what is “China” have been published recently from various standpoints in the disciplines of geography, the history of thought, and history. And one sees there the opinion that “China” or “Great China” came into existence during the Mongol, or Yuan, period. But previous research has not dealt much with what the concept of “China” meant in the Mongol-Yuan period. This paper analyzes the way two terms were used to answer the question, how people, especially the Jiangnan literati, recognized “China” in the Yuan period.

As regards the first term “China” 中國, the word “China” did not simply contain traditional, cultural and geographical meanings, but also meant the territory under the control of the central court during the Liao, Song and Jin dynasties. The Five Dynasties, Liao and Jin governments perceived that control of the central plain 中原 region was integral to “China,” but, in contrast, the Southern Song dynasty, which was unable to control the central plain, emphasized its traditions and culture as “China,” in order to bolster its claim to legitimacy to be recognized as “China.” In the first section, I compare examples of passages from the *Yuanshi* 元史 to those in earlier and later authorized histories. There are relatively few examples of the use of “China” in the *Yuanshi*. The *Yuanshi* seems to avoid using “China” as the opposite of *yidi* 夷狄. In addition, I examine examples in historical records, mainly in the anthologies of Jiangnan literati, and indicate that usage of “China” during the Yuan period differed very little from that of the Southern Song.

In the second section, I analyze the term “*hunyi*” 混一. “*Hunyi*” came into fashion during this period, and was used symbolically as a word to emphasize great territorial expanse. I mainly examine the meaning of the phrase “*huiyi nanbei*” 混一南北 that meant to unify south and north. The south and north that were joined meant for the most part the south and north of traditional “China,” or China proper. Next, I examine the differences among six maps which are titled either *Huayi*



*yitong tu* 華夷一統圖 or *Dayuan hunyi tu* 大元混一圖 in the six editions of the *Shilinguangji* 事林廣記. The maps use place-names that do not reflect correct Yuan usage ; they are, as it were, ideal maps that symbolized “unification” or the “joining” of south and north. These ideal maps are good representations of the consciousness of “China” held by the Jiangnan literati during the Yuan dynasty.

**SECRET SOCIETIES, CHRISTIANITY, OPIUM AND THE SOCIAL  
STRUCTURE OF THE XINGHUA 興化 REGION IN FUJIAN PROVINCE  
DURING THE EARLY REPUBLICAN PERIOD : A CASE STUDY OF  
THE HUANG LIAN 黃濂 REVOLT**

YAMAMOTO Shin

After the culmination of the 1911 Revolution in the early Republican Period, a rebellion led by Huang Lian broke out in the Xinghua 興化 region of Fujian Province. At first, this rebellion opposed the heavy taxation and regulation of poppy cultivation which, at the time, functioned as an indispensable source of income for the local peasant population. The rebellion then moved on to target and attack churches and Christians affiliated with the American Methodist Mission. The revolt has garnered the high praise of Marxist Chinese scholars, who have tended to see it as a mass anti-imperialist and anti-foreign religion movement.

However, the Methodist mission was making efforts to regulate poppy production in cooperation with the government at the time. If such was the case, why did the revolt target Methodist churches? This paper will investigate the anti-church movement led by Huang Lian in connection with the Xinghua region's historical background and socio-economic situation to understand the underlying reasons for this.

This paper will also clarify the social background of the Black and White Banners, a secret society who gave Huang Lian their full support in his revolt efforts. From 1912 to 1913, Huang Lian's corps continued to engage in military action across the Xinghua region, clashing multiple times with the regular Chinese army. The so-called Black and White Banners, a secret society which had been in operation across the Xinghua region since the late Qing period, backed these military campaigns. This article will thus clarify the organization's social background in relation to historical scenes of strife in the Xinghua region where multiple feuds occurred between different lineage and villages.